

市立

いちかわ 自然博物館だより

令和 5 年(2023年)

6-7月号

(通巻 206号)

2023年度

あたりまえの風景に
あたりまえの生き物に
あたらしいときめきがある！



自然博物館収蔵写真

ラミーカミキリ

動物園内のフヨウで毎年、発生します。図鑑を眺めて印象に残る昆虫ですが、実物は結構、小さいです。

P1 ☀ いきもの写真館
ラミーカミキリ

P2 / 3 ☀ 外来生物に関してー2
人里植物という考え方

P4 ☀ センサーカメラとっておきをご紹介
フクロウのきょうだい

P5 ☀ 長田谷津のとりたち
カルガモ

P6 ☀ くすのきのあるバス通りから
クモとネコ

P6 ☀ 展示室 飼育生物の話題
コオイムシの餌

P7 ☀ わたしの観察ノート
3～4月頃の記録

P8 ☀ ご案内

博物館だよりはカラー版をホームページでご覧いただけます。

人里植物という考え方

前号で紹介した帰化植物という考え方のベースには、人里植物という考え方があります。人間の生活圏に生育する植物（おもに草本）を分類ではなく、生えている環境でひとまとめにした呼び方です。私たちの身の回り、つまり人里に生えている植物ですから、要するに雑草のことです。

「人里植物」という言葉

「房総の生物」（河出書房新社）という本があります。1985年に出版され、編著者は房総の生物編集委員会、監修者は沼田真先生と大野正男先生です。ちょうど当館をつくる準備をしていた頃に出版された本で、当時、千葉県の自然について網羅的に扱った一般書はほとんどなかったので、展示準備を進める上で大変参考にさせていただきました。

「房総の生物」は全5章で構成され、第2章が「房総の植物」です。その中に「あき地・路傍の植物」という項目があり、そこに人里植物が登場します。興味深いのは小項目の流れで、

【あき地・路傍の植物】

人里植物と雑草
帰化植物のくらし
タンポポの勢力争い
はびこる帰化植物
分布を広げる帰化植物

という構成になっています。帰化植物について論じる前段として人里植物が取り上げられています。

では人里植物とは何かと言うと、書かれ

ている定義を要約・意識すると、私たちの身のまわりを生活の本拠地としている雑草を、作物の生育に影響を及ぼす農業的な意味での雑草と区別する意味で「人里植物」と呼ぶ、ということです。生活から農業的な要素がなくなってしまった都市生活者にとっては、雑草＝人里植物と言い切ってしまうといいでしょう。植えてもいないのに勝手に生えてくる植物のことです。

「人里植物」と「帰化植物」

帰化植物の前段に人里植物が出てくるのは、帰化植物になり得るのは人里植物だけだからです。第2章には「房総の植物」として「海岸の植物」「房総の山と谷」「北総台地の植物」などの項目がありますが、帰化植物となるのはそれらの項目に出てくる植物ではなく「あき地・路傍の植物」の項目に出てくる植物なのです。いまでは外来植物が山岳地帯にまで進出して問題化していますが、それは道路や観光施設といった人里が山岳地帯の中にできてしまったことの結果とも言えます。

人間の生活圏に生える人里植物だからこそ、物流に乗って海を越える機会を得ることができます。「人里植物はコスモポリタン」という言い方もしました。人里植物は必然的に全世界的に分布する、というこ

とです。逆に言うと、帰化植物はすべて人里植物という性質を持っている、ということです。外来植物としてただ種名を列挙し、問答無用で悪者扱いする昨今の風潮とは一線を画しています。帰化という現象を仕組みから理解しようとする態度が、当時はありませんでした。

何食わぬ顔をした帰化植物

人里植物が海を渡る機会を持つということは、海を越えて渡ってきた外国の人里植物が身近にあるということでもあります。長い引用になりますが「房総の生物」では「現在、人里植物として私たちの身のまわりに生活しているセイヨウタンポポ・ヒメムカシヨモギ・ヒメジョオン・ブタクサ・オオイヌノフグリなどは、いずれも明治初年に日本へ入ってきたもので、今では完全に帰化を完了し、あたかも昔から日本に生活しているような顔で人里植物の一員としての地位を占めている。」という記述があります。人里植物という特性を理解すれば、帰化あるいは外来という現象は必ずしも忌避すべきできごとではない、というように読み取れます。

ただし動物は事情が異なります。人間の都合で意図して持ち込んでいますから、人里植物が帰化植物になるのとは異なっています。あらゆる種類の動物が持ち込まれ得る、という点で深刻です。



セイヨウタンポポ



ヒメムカシヨモギ



ヒメジョオン



ブタクサ



オオイヌノフグリ



センサーカメラ とおきをご紹介

自然博物館では、長田谷津(大町公園自然観察園)の斜面林内にセンサーカメラ(自動撮影装置)を2か所、設置しています。1か所は人工的に作った水場、もう1か所は「けもの道」です。記録は動画ですが、ここでは静止画像を切り取って紹介していきます。



フクロウのきょうだい

この年は、近くにあるフクロウの巣にもセンサーカメラを設置して繁殖を継続観察していました。2羽のヒナを確認していましたが、カメラのバッテリー切れで巣立ちまで確認することができませんでした。夏に写ったこの動画が、無事な巣立ちを教えてくださいました。幼鳥は頭部に白い羽毛が残りますが、もうそれもほとんどありません。この動画の後には、飛び立ってしまったと思われます。長田谷津では十分な餌の確保はむずかしいのでしょうか。体の大きさにずいぶん差があります。

長田谷津のとりたち

自然博物館で行っている鳥類調査の記録から
一押しのとりにちをエピソードと共に紹介します。

カルガモ

カルガモは日本では珍しい、一年を通して観察できるカモです。日本にいるカモ類のほとんどが、主に冬を越すためにやってきます。市川市には約 20 種のカモ類がいますが、年間を通して観察できるのは、カルガモのみです。

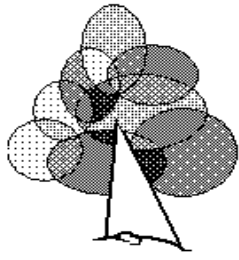
長田谷津では年間を通して観察できますが、最近は減少気味です。2010 年頃にはよく見られ、長田谷津全体で 80 羽を超えていたこともあります。しかし、ここ数年は 2 羽ほどが見られる程度です。減少の要因としては、開放水面の減少が考えられます。長田谷津では遷移が進み、かつて池だった場所が埋まりつつあります。開放水面が少なくなり、池も浅くなったため、カルガモにとっては住みにくくなっていると思われます。

なぜそんな場所に卵？

2022 年 5 月の出来事です。大池(噴水池)のもう動かない、噴水の上に、カルガモのメスが 1 羽と、卵が乗っていました。本来、カルガモは枯れ草と羽毛などを使った巣を作り、10 個ほどの卵を産みます。今回、巣はなく、メスが卵を世話している様子もありませんでした。何かしらの要因でこの場所で産卵し、放棄されている卵であると思われます。以前、同じ長田谷津内のエコアップ池で今回のケースに近いことがありました。知られていないだけで、このようなことは、よくあるのでしょうか？ 身近なカルガモもわからないことだらけですね。後日、卵はなくなっていました。



カルガモのメスと足元に卵（2022 年 5 月 20 日）
大野町 4 長田谷津



クモとネコ

4月15日、小雨が降る夜8時頃、近所から動物がじゃれ合っているような小さな声が聞こえました。録音して、自然博の方に尋ねると「こだぬきですね」と。最近ウグイスが、毎日鳴いています。夕暮れに、広い駐車場の空をコウモリが飛んでいます。藪になっている庭と、木造の空き家があるからかもしれません。真間川近くの空き地にヤセウツボが咲いていました。我が家の庭の実生のミカン？が、20年経って初めて花をつけました。いいにおいがします。

5月14日、網戸とシャッターの間に、アシダカグモを見つけました。白い丸い

物がおなか側についていました。シャッターを開けると外に出ていきました。白い丸い物は卵囊(らんのう)だそうです。違う窓で保護猫が、網戸の内側の、脱走防止金網の辺りを、俊敏な動きで、何かを捕まえようとしていました。ポロっと落ちたのを取り上げると、尻尾が切れたばかりの小さなヤモリでした。庭に逃がしました。数日後、違うアシダカグモのバラバラ死体が家の中にあり、脱皮したものと思ったかったのですが、猫に遊ばれたようでした。

(M. M.)

No.49

展示室 飼育生物の話題

コオイムシの餌

長田谷津で卵を背負ったコオイムシを見つけると、展示します。水生昆虫は人気があります。生まれた幼虫は共食いが激しくて数が減りますが、ある程度まで育てることができます。

コオイムシの餌は巻き貝です。体の大きさに合ったモノアラガイやサカマキガイを前足に持たせると、とがった口を刺して食べていきます。今回、代用食としてアサリの足を使いました。冷凍アサリ

を魚などの餌に使うので、その時に足を残してコオイムシに与えます。問題なく食べるので、巻き貝の入手に神経を使う必要がなくなりました。



アサリの足の肉片を抱えたコオイムシ。水草につかまって、さかさまの態勢で餌を食べているところ。



◆長田谷津より

- ・草刈りの終わった湿地で、トラツグミが餌を探していました(3/15)。今シーズンよく見られている、警戒心が薄い個体です。目の前でダンスのような独特な動きをしていました。

稲村優一(自然博物館)

- ・ミツガシワがだいぶ咲いてきました(3/21)。高水温が苦手な植物なので、ミツガシワ群落の状態が、長田谷津の湧水の状態を表す指標になるかもしれません。
- ・コミスジがひらひら？ ぱたぱた？と飛んでいました(4/20)。白黒のおしゃれなデザインの蝶だと思います。

以上 金子謙一(自然博物館)

◆真間山より

- ・南側斜面林で、今年もウグイスの鳴き声がきかれました(3/20)。

◆菅野より

- ・文学の道沿いで、ウグイスの鳴き声を聞きました(3/13)

◆真間より

- ・投票に出かけた真間小の校庭に、ムクロジの実がたくさん落ちていました(4/9)。そばを見上げると、大きな木がありました。木があることをはじめて知りました。

◆国分より

- ・スーパーの駐車場付近で、ツバメが飛びまわっていました(4/22)。

以上 M.T. さん

◆八幡より

- ・カンヒザクラが開花しました(3/11)。
- ・京成八幡駅付近のビルの上で、イソヒヨドリが鳴きました(3/12)。
- ・ヒキガエルが集まっていました(3/13)。

◆北方より

- ・ウグイスが鳴きました(3/8)。

以上 M.M. さん

◆中山より…少し前の記録も

- ・聖教殿脇のクスノキの枝に、コサメビタキが2羽止まっていた(2022. 10/9)。目がかわいらしい。
- ・龍王池の脇で、カワセミ1羽が飛んだ(1/8)。聖教殿の脇にオスのモズが1羽。シジュウカラのさえずりも聴こえた。
- ・境内にシジュウカラ8羽の群れ(1/16)。ヤマガラ1羽混じっていた。聖教殿の参道ではシロハラ1羽が採食していた。

◆北方町遊水地より

- ・護岸にセグロセキレイが2羽、下りていた(1/19)。

◆大柏川より

- ・大柏橋の下流にはコガモとオオバンが多く、ハシビロガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロも(1/19)。カワセミが1羽飛び、護岸にキセキレイが2羽。キセキレイがとても華奢に見えた。

◆原木 真間川より

- ・カルガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、オオバン(1/11)。カンムリカイツブリが1羽浮き、イソシギが1羽、護岸を歩いていた。
- ・カワセミが2羽(3/11)。1羽がもう1羽を追うようにして、上流へ飛んだ。

以上 田中利彦さん(船橋市在住)

3月に入った途端に汗ばむような陽気になりました。ソメイヨシノは4月に入る頃にはほとんど散っていました。雨は降るとひんやりしましたが、少なめでした。

動画ファイルを、学校へお送りします



自然博物館では、教育普及用のオリジナル動画の制作を進めています。自然博物館のwebサイトからYouTubeでご覧いただくこともできますが、授業や教材研究などで用いるには画質に難があります。古いものは低画質ですが、ハイビジョン画質の動画ファイル（MP4）もあります。それらを学校に直接提供することが可能です。動画は、博物館と学校、双方のセキュリティの点から、DVDディスクでのご提供となります。

○ 展示、教育普及用動画

博物館の展示室や学校での出張授業の際に使う想定で作ったものです。たとえば、つぎのようなタイトルがあります（ほかにもありますのでお問い合わせください）。

- ・「ノコギリガザミのお食事」（低画質）・「ホオジロの巣立ちに遭遇」（低画質）
- ・「江戸川放水路のトビハゼ」（ハイビジョン画質）

○ 長田谷津（大町公園内）動画スケッチ

動植物園に隣接する大町公園「自然観察園」の毎月の記録です。景観、動植物、湧き水など、四季折々の様子を記録しています。画質はすべてハイビジョンで、調べ学習で繰り返し再生したりノートに書き写すことを想定して、解説は字幕です。

2020年9月分からあります。

○ センサーカメラの記録

自然観察園に設置しているセンサーカメラが撮影した哺乳類と鳥類の動画を編集したものです。画質はすべてハイビジョンで、解説は文字画面です。ひと月ないし数か月単位でまとめられています。ノウサギやオオタカなど、自分たちでは観察できない生き物の様子が写っています。また、タヌキやフクロウなどについては、それぞれ短くまとめたものもあります（字幕解説なし）。

＜行事のご案内＞

長田谷津は、
大町公園の自然観察園のもともとの呼び名です。

○長田谷津散策会

（申し込み不要・荒天中止）

季節の風景や動植物を楽しみながら、
ゆっくりと散策します。

集合：動物園券売所前 午前10時

解散：集合と同じ場所で 午前11時30分

○湿地の環境整備をお手伝いして

くださいませんか

（要問合せ・荒天中止）

学芸員と一緒に環境整備作業を行います。

たとえば……湿地の草刈、枯れ枝のかたづけ、
水路の整備、など

集合：観賞植物園 午前10時

解散：集合と同じ場所で 午前12時

初参加の方は・・・

お電話で博物館までお問合せください。

湿地の中に入る作業もありますので作業内容や
身支度などについてご説明します。

	長田谷津散策会		湿地環境整備	
8月	13日	日曜日	おやすみ	
9月	10日	日曜日	24日	日曜日
10月	15日	日曜日	29日	日曜日
11月	12日	日曜日	26日	日曜日
12月	10日	日曜日	24日	日曜日
1月	14日	日曜日	28日	日曜日
2月	11日	日曜日	25日	日曜日
3月	10日	日曜日	24日	日曜日

第36巻 第2号（通巻第206号）

令和5年6月1日 発行

編集・発行/市立市川自然博物館

（市川市教育委員会生涯学習部）

〒272-0801千葉県市川市大町284番地

☎047(339)0477